

「見つけ出された人」（ルカによる福音書一九章一〜一〇節）

1 ザアカイ

今日はザアカイの話です。聖書ではここにしか出て来ない人物ですが、有名人といつてよいと思います。

いまお読みしたように、ザアカイが木に登ってイエスを見ようとしたとか、なぜか分からないけれど、イエスによって見つかってしまうとか、これも、なぜか分からないけれど、ザアカイという名前をイエスが知っていて、彼の名を呼んで呼びかけられたとか、みな印象深い話です。日曜学校、教会学校では、紙芝居などの定番の箇所でもあります。

ところでザアカイという名前ですが、ユダヤ人の名前としてはザカリヤが正式なものようです。そのギリシャ語名がザツカイオス、それを短くしてザアカイです。日本では昔の文語訳聖書からザアカイで、変わりません。

この出来事、それ自身とても面白いのですが、私どもルカによる福音書を読んできて、前後関係が少し見えていますので、その観点を加えて、今日はこれを読み進めることができると思います。

何より最初に確認しておきたいのは、今日の箇所は、イエスのエルサレムへの旅の最終局面での出来事だということです。場所はエリコです。エリコはユダヤに属しますが、いわばその玄関口に当たり、エルサレムまでおよそ二〇キロの道のりです。

先週私ども、イエスがこのエリコの町に〈近づいたとき〉のこと、すなわち、物乞いの盲人の癒やしのことを読みました。今日の箇所では、イエスはエリコの町に入つて、いま通過中です（一節）。民衆がイエスに付き従っています。ずっと付いてきた人たちだけではなく、エリコの住人も、イエスが来たということで、大勢の人が通りに出て来たようです。

そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであった。イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かったので、群衆に遮られて見る事ができなかった。それで、イエスを見るために、走って先回りし、いちじく桑の木に登った。そこを通り過ぎようとしておられたからである。イエスはその場所に來ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた（二〜六節）。

「イエスがどんな人か見ようとした」とあります。「見ようとした」という言葉から、ザアカイが以前からイエスに関心をもっていたと想像することが許されると思います。そうでなければ、ただ見るために、ここにあるような行動を取るはずはないからです。

彼は、同じ徴税人の仲間がバプテスマのヨハネから洗礼を受けることを許されたこ

とを知っていました(三・一二)。イエスの弟子の中に徴税人もいるということも(五・二七)、イエスが罪人や徴税人と食卓の交わりを持っておられることも(一五・一)、知っていたに違いありません。それが、イエスがどんな人が見たいと思わせた、彼の動機の一つだったのでしょうか。我が町エリコにイエスがやってきました。彼は、そこに、自分の別の可能性というか、非常に引かれるものを感じとったのです。

2 見つけ出される

そのザアカイ、聖書は、彼が見ようとして取った、あるいは取らざるをえなかった複雑な動きを、伝えていきます。

矛盾した二つの動きを辿ることができません。一つは、イエスを何としても見ようとする動きです。じつさいそのために、ちよつと驚くような行動なのですが、ザアカイは、木に登ったのです。

もう一つは、この木に登ったことに表れているその意味に関わりません。すなわち彼は、身を隠したのです。見ようとする者が、見られないように身を隠す、求めている者が後ろに退き、身を隠そうとしているのです(ルター)。イエスの前に出ようとして、引っ込むのです。この矛盾した姿に、じつは、ザアカイの人生が集約されて示されています。

どうして、彼は、そんなふうに、イエスを求めながら、隠れなければならなかったのでしょうか。

そのことを、この場合は、差し当たり、彼の職業から説明するのが、適当だと思います。

彼は「徴税人の頭で、金持ちであった」とあります。「徴税人の頭」という、ここですべて使われている言葉は、正確な意味がはっきりしないようです。ちよつと上の徴税人ではなくて、徴税人たちの間の支配者、権力者という意味だと理解する人がいます(グリーン)。それに従えば、ザアカイはユダヤ人であり、徴税人であるだけでなく、権力者であり、そして何より金持ちであったとなります。

ご承知のように、当時のユダヤ社会では、ローマ政府におさめる税の取り立ては少数のユダヤ人徴税請負人に任せられていて、彼らはまた、それを、しばしばさらに下請けに代行させていました。徴税人の多くは、ローマの権威をバックに、納めるべき額以上のものを、同胞たるユダヤ人から取り立て、私腹をこやしていたと言われています。したがってユダヤの民衆にとっては、彼らは、まさに異教の支配者の手先であり、汚れた背教者であり、「罪深い男」(七節)であり、また「アブラハムの子」(九節)、つまり仲間と見なされるべき人間ではなかったのです。社会の交わりから、宗教的な交わりから、除外されていたのです。ましてザアカイは、とくに知られた存在だったのです。

沿道で、イエスを見たくて前に出ようとしたザアカイが「群衆に遮られた」とありました。聖書には、「背が低かったので」遮られたとあります。もちろんそれもあつたかも知れませんが、人々は彼のために場所を空けてやることをしなかつたということです。そしてそれが、木の上に登って身を隠さなければならない理由の一つであつ

たのです。

イエスが近づいて来ます。通り過ぎようとしているかに見えます。しかし「イエスは、ザアカイが隠れていた場所に来ると、上を見上げて言われた。『ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい』。ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた」。

イエスのところに大勢の人が押し寄せ、ごったがえしていました。その混乱の中でイエスは、しかし、ほかでもない、ザアカイ目指して近づいてこられたのです。「ザアカイよ!」、イエスは彼に呼びかけます。イエスはその名を呼んで、いま隠れの中から引き出されます。

ザアカイを、神の子イエスは知っていました。どうしてか分かりませんが、知っていました。神は私どもを私どもが神を知る前から知っておられます。私どもは知られていきます(コリント一、一三・二)。神は私どもを、私どもが自分を知るよりも、もっとよく知っておられます(ローマ八・二七)。これが聖書の認識です。

「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」——詳しく訳せば、今日、わたしはあなたの家に泊まらなければならない「泊まることになっている」です。まるではじめから、神のご計画の中に、神の予定の中で決まっていたような言葉です。たしかにザアカイは神の救いの中にとらえられていました。イエスは「あなたの家に泊まる」といって、ザアカイを、あるがままに、つまりその矛盾のままに、その苦悩のままに受け入れ、交わりを与えてくださったのです。

ザアカイは見つけ出されます。それはちょうど群れから迷い出た一匹の羊が発見されたように(一五・四)、いなくなっていた放蕩息子が見つかったように(一五・二四)、見つけ出されます。

3 救いがこの家に来た

イエスの突然の呼びかけに、隠れていたザアカイは、きつと、びっくりしたでしょう。しかしそれはすぐ「嬉しさ」に変わりました。彼は「急いで」いちじく桑の木から降りてきます。そして「喜んで」イエスを迎えます。そこに何の躊躇もありませんでした。

ザアカイは見つけ出されます。矛盾の中にある人間が矛盾のままに呼び出され、受け入れられます。何もとりつくりする必要はありません。なぜなら自分のことがすべて知られているからです。

それはザアカイだけではありません。私どもにも、神に向かって大きく身体を伸ばしたいのに、そうさせない、気がかりなことが多くあります。しかしそれを自分で処置してから、神のもとへ来ることが求められているではありません。そのまま私ども神に招かれています。神は私どもを呼びたまいます。それが私どもの新しい出発をなすのです。

これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行って宿をとった」。しかし、ザアカイは立ち上がって、主に言った。「主よ、わたしは財産

の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」。イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」(七〇一〇節)。

ザアカイの新しい生活への出発は、イエスを「主」と告白するところから始まりました。それは、この直前、エリコの町に入るところで癒やされた物乞いの盲人が、そうであったのと同じです。かくて二人は、いまエルサレムに入ろうとするイエスこそメシアであると証ししたのです。

ザアカイは、主の前に、こう約束します。財産の半分を貧しい人々に施す、だれかから何かだまし取っていたら、四倍にして返すと。「貧しい人々」の存在が、他人のことが彼の人生の視野の中に入ってきます。いままでそんなこと考えたこともなかったのです。新しい生活は、神の民の一人として、人びとと共に生きようとすることであります。

「半分」というのは、掟に何か規定があるわけではありません。前章、一八章に出ている「金持ちの議員」、彼はイエスから持っている物すべてを売り払い、貧しい人々に分け与えなさいと、言われていました。「すべて」(一八・二二)です。彼には、掟に対する違反があったのです。

また「だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」というのも、ザアカイに何か思い当たるふしがあつてのことではありません。なるほどここには悔い改めへの心構えが響いています。しかしこれはむしろ新しい生活に向けて彼の信仰の決意なのです。

信仰の決意です。彼はその信仰を言い表します。そしてイエスは、いまここに信仰の新しい生活がはじまったことを、イエスは人々の前で(「この人も」に注意)、宣言なさったのです。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」。

このイエスの言葉がこれからのザアカイの新しい生活を支えます。しかし新しい生活とは、ザアカイが徴税人の生活をやめるということでありませんでした。彼は徴税人の頭でありつづけます。ですから、ザアカイを見る世間の目が、今までよりきびしくなくなつたというわけではないのです。

ローマとユダヤの関係が変わらない以上、徴税を巡る社会関係の矛盾も、それにまつわる悪も取り除かれるということではないでしょう。この職業につきまとう汚れから完全に自由ではありません。

しかし彼には、そうした徴税をめぐる色んな問題が、以前よりはっきり、大きく見えていたことでしょう。それゆえ彼は、そうした現実に抗して、さつき主の前で約束した生活を生きようとはじめるのです。徴税人をやめることではない。そうではなくて、この世のただ中で、いかんともしがたい矛盾の中で、この世をおおう暗闇の中で、しかし信仰の新しい生き方をはじめることです。そしてそこに神の国は確かに明け初めるのです。